



Title	筑後據本『那須与市小桜威』の淨瑠璃史的意義
Author(s)	横山, 正
Citation	語文. 1974, 32, p. 93-103
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68626">https://hdl.handle.net/11094/68626</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 筑後掾本『那須与市小桜威』の淨瑠璃史的意義

横山正

『外題年鑑』には竹本筑後掾の語り物中に『那須与市小桜威』を挙げているが、これに類似の題名のものは管見では、演劇博物館蔵の『那須与一小桜威』(大阪、山本版八行本)と架蔵の『那須与市小桜威井船遺恨』(題簽「那須与市小桜威」、大阪、本屋仁兵衛版八行上本)の二種の他には知らない。

まずこの両者を比較するに、内題と版元とを異にする別版であるため、当然本文の漢字・仮名の相違、節附の一部分の違いなど見られるが、本文は殆んど同一文章である。僅かに見られる違いは、同一文章中の一、二の文句の相違が散見されるのと、一か所だけ一、二行にわたって文句の増減がある程度である。次にその全部を対照して掲げておく。

那須与一小桜威(演博本)	上之巻	○「なすの与しまめくり」の見出しが見出しが島廻りの直前にある。
那須与市小桜威井船遺恨(架蔵)	上之巻	○「島廻り名所尽」の見出しが島廻りより少し前にある。

○「嶋廻り」りける。	○御しまめぐりと聞へけり。
○みのゝ国の住人はちやのくは んじやさだ国也	○みのゝ国の住人くはんじやさ だ国なり
○かゝるくはんげんはかるゝ ぞ。	○かゝるくはうげんはかるゝ ぞ。
○いづくとやつばを好み給へ ○それへ見へしは	○いづくと矢つばをこのみ給へ ○ヤアそれゑみへしは
○さしつめ引つめやさき ○こぶんし御らんしやがて	○さしつめ引つめある矢さき ○こぶんじ与市と御らんじやが
○此うへはせいもなし(筆写部 分)	○此うへはぜひもなし
○あらうらめしの(同右)	○ア、うらめしの
○我ばしからむるな(同右)	○我ばしうらむるな
○つらぬく玉のこと也(同右)	○つらぬく玉のごとく也
○ゑちごのぢうにん(同右)	○ゑちごの國の住人
○いがらのこぶんじ(同右)	○いがらしのこぶんじ
○北の方と姫君も(同右)	○北のかたも姫君も
○中之巻	○中之巻北のかた道行

- 夜はまだふかく  
○いづかたへ通らるぞ。  
○たはことはあやまりなればま  
つひらゆるせ  
○とぶんじ聞召。  
○程なくほりに  
○こぶんしのたちに入給ふ  
○いかに千王丸殿。  
○さいぜんじたい申は  
○こぶんじ聞召  
○先宗高殿  
○ふしきなれ。國中けふの御祝  
義とて「もん  
地かゝる  
○しばらく時こそうつりけれ。  
○道ふさ。北のかた姫君をかた  
はらに忍ばせ。こぶんしのも  
んに入御ばんのお衆頼み申さ  
ん。某はかまくらの飛脚比状  
上へあげてたべ。たうばんや  
がてこぶんし殿の御前に
- 夜をまだふかく  
○いづかたへとをらるゝぞ  
○たはことはあやまりなればま  
るせ  
○こぶんじ聞召。  
○程なくほりに  
○こぶんじのたちに入給へば  
○いかに千王丸。  
○さいぜんじよりじたい申は  
○こぶんじは聞召  
○いや先宗高殿  
○ふしきなれ。かゝるめでたき  
折なれば「もん  
かゝる  
○しばらく時こそうつりけれ。  
○道ふさは親子の人ぐ御供  
し。やう／＼ゑちごにつきし  
かばこぶんじ殿のもんせんに  
て。先北のかた姫君をかたは  
らにかくしをき。ばんの侍に  
近付て。某はかまくらよりの  
使也。此状上へあげてたべば  
人の者請取て。やがてこぶん  
じ殿の御前に
- いそぎ帰りて  
○ふうふの人々是は  
○こぶんし殿のやういく
- いそぎ帰りて  
○きつと帰りて  
○夫婦の人々は是は  
○こぶんじ殿の御やういく

○誠に与世屋一人にかぎすら 下之巻	○誠に与市殿一人にかぎらす 下之巻
○去間頼朝は（へ）きろく所に御 出あり	○去間頼朝公きろく所に御出有
○さゝ木四郎	○さゝ木四郎
○さゝ木ノ四郎	○さゝ木ノ四郎
○火にとをのけばあづさわする かゝる ○しばらく時こそうつりけれ。 ○道ふさは親子の人ぐ御供 し。やう／＼ゑちごにつきし かばこぶんじ殿のもんせんに て。先北のかた姫君をかたは らにかくしをき。ばんの侍に 近付て。某はかまくらよりの 使也。此状上へあげてたべば 人の者請取て。やがてこぶん じ殿の御前に	○火にとをのけばあづさわする かゝる ○火にとをのけばあつさわする かゝる ○しばらく時こそうつりけれ。 ○道ふさは親子の人ぐ御供 し。やう／＼ゑちごにつきし かばこぶんじ殿のもんせんに て。先北のかた姫君をかたは らにかくしをき。ばんの侍に 近付て。某はかまくらよりの 使也。此状上へあげてたべば 人の者請取て。やがてこぶん じ殿の御前に
○若者共が我まゝを ○君御たいせつに思召す。	○若者共が我まゝを ○君たいせつに思召す。

この対照表に見る程度の相違であるため、この二種のものは同一作品とみてよいであろう。ところで問題は、この初演年代であるが、宝暦版「外題年鑑」では前掲の題名だけを挙げ、年月の記載はないが、その他の刊年の「外題年鑑」では「元禄十丁丑年二月朔日」とする。元禄十年には竹本義太夫はまだ筑後掾を受領していないが、先に挙げた演劇博物館本も架蔵本も共に竹本筑後掾本である。しかもこれらの淨瑠璃は再演された記録もなく、架蔵本は刷りの鮮明な献上本で、再刊本とは考えられない。また両者の奥附をみると、演博本は

右之本令吟覽頌句音節墨譜」等不殘毫厘令加筆候「可有開」版者也」の竹本筑後掾の識語と  
重而予以著述之本令技合候」畢全可為正本者歟」

の近松門左衛門の識語をもつ大阪の山本九兵衛・九右衛門版（「九右

衛門」は虫損)である。尤もこの近松の識語と署名とは、柳亭種彦が『柳亭淨瑠璃本目録』で言つてゐるよう、全く信用できないが、この奥附が用いられたのは、近松淨瑠璃本の場合の例から考えても、筑後掾受領(元禄十四年)以後の元禄から正徳頃までである。

架蔵本の奥附は

右此本者依為懸望文句音節等悉挿合加秘密令閑版者也」

の竹本筑後掾の識語を持ち、作者名はなく、大阪、本屋仁兵衛版である。この形式の奥附も演博本と同じく、筑後掾受領以後の元禄から宝永頃までの淨瑠璃本に多く附けられている。これらのことから考へると、今後、義太夫署名本が現われない限り、これらの初演並びに刊行は、古くみても元禄十四年の筑後掾受領以後、元禄末年頃にかけての頃とみるべきで、元禄十年までは遡りえないであろう。

次に『那須与一小桜威』と『那須与市小桜威井船遺恨』との前後関係はどうであろうか。原則的に言へば、筑後掾本の正式の書肆は山本であるため、後者、仁兵衛版より信用すべきものである筈である。しかし題名から見る場合、前者の「与一」よりも後者の「与市」の方が『外題年鑑』の記載と一致するし、後者の「井船遺恨」は古淨瑠璃(後出)の題名の名残がみられ、後者の方が古いかの感を抱かせる。また右に挙げた、これら両者の対照表を見るに、上之巻では後者の「かゝるくはんげんはかるよぞ」が前者では「かゝるくはんげんはかるよぞ」とあり、これでは意味が通じない。後者の「いづくと矢つぼをこのみ給へ」が前者では「いづくとやつばを好み給へ」とあるのも同様である。後者の「さしつめ引つめる、矢さき」が前者では「さしつめ引つめやさき」と不完全である。また中之巻でも、後者「こぶんし聞召」の人名が前者では「とぶんじ

聞召」と間違つてゐる。後者の「程なくいほりに」が前者では「程なくほりに」といが脱落してゐる。後者の「誠に与市殿一人に」が前者では「誠に与世屋一人に」と全く書き間違つてゐる。後者で「去間頼朝公、きろく所に御出有」とあるのが前者では「去間頼朝ハ、きろく所に御出あり」となる。これは公の草体をハと読み違えてい

る。また後者の「火にとをのけばあづさわする」が前者では「火にとをのけばあづさわする」と文意が不明となつてゐる。このよう常に後者の表記の方が正しいのであるが、このことは直ちに、前者が後者を写し誤つたとは言えない。けれども、少なくとも後者に近似するものがあつて、それを書き直して刊行する場合の誤りと考へざるをえない。とすれば後者の形の方が前者よりも古い形を示していることは一応言えそうである。

これらのことと先の題名の件と考へ合わせる時、また、この時期は未だ版権の混亂時代(大阪での一応の版権確立は享保八年)でもあって、山本版のみが必ずしも正統とも言えず、これらのことから、やはり後者の方が原形に近いと言つうのが妥当であろう。また残念なことに前者演博本は一丁欠けており、それを墨書きで補つてあるが、対照表が示すように、その部分には明らかな間違いが多いため、ここでは欠くもない後者『那須与市小桜威井船遺恨』によつて以下の考察をする。

## 二

この作に酷似した題材による先行作品を本作との比較の意味で一応検討しよう。

本作との関係で最も注目される主なものに『なすのよいこん』(寛

文三年五月、京、山本九兵衛刊)、『なすの与一竹生鳩詣付舟いこんの事』(寛文三年六月、八文字屋八左衛門刊) (共に『古淨瑠璃正本集』第三所収) が見られる。前者『なすの与いこん』には更に古版の江戸版があつたらしいことが横山重氏により推定されている(『古淨瑠璃正本集』第三、解題)。また同氏は後者『なすの与一竹生鳩詣付舟いこんの事』も別の太夫が同じ江戸古版から改作したものと推定される。更に右の八文字屋版を江戸で複刻したものには、元禄頃とするが、ここでは上方のものを中心として見るため、これら江戸版は一切省略する。

そこで『なすの与いこん』と『なすの与一竹生鳩詣付舟いこんの事』との比較であるが、前記のように、後者は前者より僅か一ヶ月おそいだけで、しかも同一江戸古淨瑠璃からの上方での改作とみられるにも拘らず、この両作品の間には、かなり著しい相違がみられる。

まず段組織では、前者は五段からなるが、後者は十一段に分けられている。

次に内容の面では『なすの与いこん』の第四の前半までが『なすの与一竹生鳩詣付舟いこんの事』と著しく異なっており、前者の冒頭の那須野の花見における遺恨が後者では琵琶湖での舟遺恨となっているのをはじめ、登場人物名も異なり、筋の展開の細部にも多くの違いが見られる。しかし高綱の館以後は両者よく一致して殆んどが類似場面になっている。この二作品は共に活字翻刻もされているので、梗概は省略して、両作品の比較しうる相違点の特徴を次に挙げておく。

なすの与いこん	なすの与一竹生鳩詣付舟いこんの事
(1)陸上(那須野)での遺恨(第一)	(1)湖上(琵琶湖)での遺恨(第一)
(2)配所で与一は早川庄司の土牢に入れられて、陰惨(第三)	(2)配所で与一は館を与えられ、優遇されるばかりでなく、小
(3)盗賊に襲われたり、宿の主人夫婦の裏切などの不信行為によつて、与一の奥方や姫などの苦労が強く表現されて暗い(第三、四)	(3)梶原や定国以外には不信行為もなく、奥方などの苦痛描写親にまでなつて、明朗(第五、七)
(4)梶原の悪心を示す明らかな具体的な証拠物件はない(第三)	(4)梶原の悪心を伝える明確な証拠としての手紙がある(第六)
(5)特に劇的構成とみられる所はない(第七)	(5)与一が自分の本当の子とは夢にも知らず、家宝の矢を小豊次の拾い子に与える劇的構成がある(第七)
(6)頼朝は梶原をただ盲愛しているに過ぎない表現(第五)	(6)頼朝は自分の命の恩人である梶原を自己の命にかえても一度は助けるという具体的な約束のあることを明らかにする(第十一)

右の両者を比較して言いうことは、(2)(3)では『なすの与いこんの事』が暗く陰惨であるのに対し、『なすの与一竹生鳩詣』(後者)が類似場面になっている。この二作品は共に活字翻刻もされているので、梗概は省略して、両作品の比較しうる相違点の特徴を次に挙げておく。

では暗さがあまりなく、明朗な表現がとられている。(4)(6)では前者が抽象的、不鮮明な描写態度であるのに対し、後者は明確な証拠物の手紙が出され、また梶原に対する頼朝の具体的約束が交わされていることを明らかにするなど具体的、鮮明な描写態度をとっている。また(5)では前者に特に挙げるほどの劇的構成がみられないのに反し、後者では小豊次の拾い子が自分の実子と知らず、一子相伝の家宝の矢を与えることが真実の親子の血縁の深さを示すことになるという劇的構成がとられている。

この二作品は殆んど同じ時期に、同一の先行作品から改作、脚色されたと思われる同じ上方の古淨瑠璃同士でありながら、陰惨(前者)と明朗(後者)、抽象的描写(前者)と具体的描写(後者)、平板的構成(前者)と劇的構成(後者)のような相違を生じており、前者よりも後者の方が近世的新傾向への方向を、より強く示していることは、改作者、脚色者の態度の相違とみるとほかないであろう。

### 三

次に『那須与市小桜威・井船遺恨』であるが、これは活字翻刻がなないので、その梗概(『那須与一小桜威』も同じ)を簡単に挙げておく。

上之巻(口)扇の的を射て名を挙げた那須与市宗高は竹生島に参詣する。島廻り名所尽。蜂屋冠者貞国との釣船に触れ論争となる。貞国は与市の帰途を襲うが、与市の弓勢に敗れる。(中)貞国は梶原景時の助言で与市を讒言し、与市は越後の五十嵐小豊次に預けられる。与市は執権森岡源内道房を故郷に帰し、後事を託す。(切)与市の妻子は信濃川中島に身を隠し、男子を産む。御台も源内

も同じ夢の告げにより、この男子を善光寺山門に捨てる。小豊次は夢相を受け、子を拾つて帰る。小豊次が与市を預つてある人であることを源内も御台も喜ぶ。

中之巻(口)北の方道行。一人の侍が御台に無礼をする。この二人が梶原景時と蜂屋との家来で越後の五十嵐へ行くと知った源内は二人を殺し、与市を討てとの手紙を奪う。(中)小豊次は拾い子を千王丸と名付け、七才の具足親に与市を頼む。与市は家宝の矢をわが実子と知らずに千王丸に与える。この時、源内は御台・姫君と共に廻りつき、小豊次の心をたしかめるため、鎌倉の使者と偽つて奪った手紙を見せ、怒る小豊次に事情を打明ける。小豊次は喜び、与市一家の対面をさせ、千王丸を与市に返す。与市は姫を小豊次の弟小弥太に与え、佐々木高綱を頼んで無罪を鎌倉へ訴えることにする。(切)与市は高綱にすべてを語る。高綱は御家人五十三人を集め、起請を書き一同で頼朝に訴えることにする。

下之巻 高綱が訴状を奉る。頼朝は与市の罪を許すが、梶原を渡さない。朝比奈が梶原の首をとつて一同自刃すると言い、重役達も五十三人に味方するので、頼朝は命の恩人の梶原を自分の命にかけても一度は助けるとの約束があることを語り、人々も頼朝の言に従う。蜂屋は首をはねられる。

『なすの与一小桜威』と『那須与市小桜威』(仁兵衛版)とを比較すると、両者に類似の部分や文章もかなり多いが、島廻り名所尽のような景物的部分や道行が後者では、かなり長くなり、文学的修辞表現も目立ち、五十三人の起請・連判も一つ一つ長々と書いていることなど、『那須与市小桜威』の頃ともなれば、こうした所

に力を尽していることが知られる。

島めぐりの部分が両作品で具体的にどのように変化しているかを文字譜の多少（節附変化の頻度を見るため、同一文字譜の重複をも全部出す）と文章の長短との関係から眺めると、次の通りである。

なすの与一竹生鳴詣

いろとゑ・地・ふし・下おん・いろ・ふし・下おん

那須与市小桜威

フシ・中地・ウ・ウ・キン・ウ・ウ・フシ・中・ウ・ハツ  
ミ・ハルフシ・中・ハル・キン・ウ・本フシ・ハル・中・中・  
ウ・哥ハル・中・ハル・キン・中・ハル・中・ハル・フシ・中  
・ウ・ウ・ハル・中・ハル・中・ウ・小ラクリ・哥・ハル・ハ  
ルフシ・ハルフシ・中・ウ・ハル・哥・中・ハル・キン・ウ・  
ウ・三重

これに対し、文章の長さは字数にして『なすの与一竹生鳴詣』が二七六字、『那須与市小桜威』が五九八字で、後者は前者の二倍よりやゝ長い程度であるにも拘らず、節附は八倍近くの多数である。即ち後者は節の変化が、いかに多く、複雑化しているかをよく示している。尤も古い時代には丸本に節を記載することが少なかつたことも考えられるが、それでも、この著しい違いは否定できないと思う。

さらに注目されるものに文字譜の種類の相違がある。『なすの与一竹生鳴詣』の方には、少ない節の中で「下おん」が二つもあって目立つ。下もおんも共に低音の多い曲節に用いられ、暗く、静寂な雰囲気を出すものである。これに対し、『那須与市小桜威』では、「ウ」「ハル」の多いことが特に目立つ。ウ（ウク）は浮かす節で

あり、ハルは張った音を意味し、一般にやや高い明るさが加わるのが普通である。またキハは比較的高く、美しい音であり、歌は他の種々の歌を取り入れて曲調を柔らげ、変化をねらうものであるが、これらのキハや歌もやや目立っている。即ちこの二つの島めぐりの、前者の暗さ静けさに反し、後者はかなり明るく楽しい節になつていることが窺えるのである。次にこの部分の修辞を見ると、

なすの与一竹生鳴詣

かいしやうはるかにこぎ出す、おもしろのうみづらや、ながめ  
もおほき其中に、ひらやこまつあさきりに、

那須与市小桜威

かいしやうはるかに。こぎ出す。ちいはへいたに立ちあがりあ  
れく。あのうら山を御らんぜよ。天をひたせばあまの川：

なすの与一竹生鳴詣

みるくもの立まよひ、しぐれをもよをす、其けしき、是ぞ  
誠にせうしやうの、よる雨のなこりかや、

那須与市小桜威

又あれ成は是や此づくまつりに。つれなき人のあふせかたゝ  
の。うらみかず／＼恋をするにはうきみだう。いまづかいづに  
とわたる舟のふねの。中には何とをよるぞ。とまをしきねに。  
かぢを枕にかぢまくら。さぶめもらすな。もり山や。

この両者の文章を比較する時、後者が変化に富む明るい自由な表現で、生氣に満ちていることは一見して明らかであるが、ここには太夫の節の変化を与え、人形の振りを前提とした言葉の調子が明らかに織り込まれているのを見る。即ち、前掲の文字譜の音節的特徴が、

この文章的特徴とよく一致し、両者相俟つて『那須与市小桜威』の方を明るく楽しいものにしていることが知られる。

次に道行について同じ方法で両者を比較してみよう。まず文字譜では、

#### なすの与一竹生鳴謡

ふし・はる・下いろ・ふし・ふし・下あみとふし・ふし・ゆり  
・下いろ・上ふし・はるふし・いろふし・下ふし・一つゆりふ  
し・下いろ・ふし・下いろ・ふし

#### 那須与市小桜威（途中の休む所まで）

フシ・中・ウ・ウ・フシラクリ・キンハルフシ・中・フシ・ハ  
ル・中・ウ・ウ・ウ・フシ・ハルフシ・中・ウラクリ・ウ・小  
ラクリ・キン・ウ・スエテ・キン・中・謡・ウ・ハル・中・ウ  
・フシウ・中・ハル・中・中・ウ・フシウ・ハル・ハルフシ・  
中・トル・中・ハル・フシ・ウ・ハル・中・ウ・ウ・小ラクリ  
・ハル・中キン・ハル・長地・ウ・ウ・ウ・三重

この両者の比較でも文の長さは後者が前者の一倍強であるにも拘らず、節附の方は三倍強である。その違いは島めぐりほどではないが、やはり同じ傾向を示している。

また文字譜の相違も島めぐりの時と同様に、『なすの与一竹生鳴謡』に「下いろ」「下ふし」などが目立つのに對し、『那須与市小桜威』では「ハル」が目立ち、キンも見られて、両者の相違が著しい。貞享四年義太夫段物集の序文の「道行の事ふし事の第一とする也」を如実に示しているといえよう。

またその修辞の面も見ても、  
なすの与一竹生鳴謡

うすいたうげをながめこし、よもにうきなを、さらしなの、月のひかりの、かげきよみ、とまりくの、あばらやで、泪のまくら、かすそいて、あかしくらして、行程に、

#### 那須与市小桜威

涙にくもる月かげは。うするのとうげすはのうみ。ふかき情も  
有はらの。中将成しめ男。恋ゆへたびを。しなのなる。あさ  
まのだけとつらねける。山のけふりもなびかばなびけ。わが思  
ひにはくらぶまひぞのそのはらや。……

前者に比し、後者の文章は俗に碎け、感情の高潮もみられる。太  
夫の節の変化、感覚的な人形振りも計算された修辞と言えよう。さ  
きの文字譜の相違に見られる節の音楽的変化と文章表現とがここで  
もまた一致しているのである。

次にまた大きく注意をひくものに劇的場面構成の成長がある。森  
岡源内が蜂屋の使者を斬る前後も、『なすの与一竹生鳴謡』では、  
使者に不審を抱き、蜂屋冠者から越後へ行くと聞くや否や斬つて手  
紙を奪うだけの簡単な描写だけであるが、『那須与市小桜威』では、  
この使者の御台や姫君に濡れかゝることより始まり、「御手をひき  
て行ならば。千里も一里いさくらば……」のような有様である。つ  
いで無礼をとがめて源内が二人の使者を木に縛つた後に、その身分  
と用件とを知つて驚き、首を斬るなど、色っぽい滑稽、論争、鬭争、  
縛りつけ、名乗、斬首と、短い間に多彩な変化に富んだ、会話も多  
い劇的舞台を構成している。

また与一が具足親になり、家宝の矢を子と知らず譲る場も、『な  
すの与一竹生鳴謡』では、  
げにやわがこにちうたいを、ゆづるとしらぬ、おやと子の、こまし

るの内こそ、あはれなれ、ともかくにもよの中の、物のあはれは是也とて……

『那須与市小桜威』では、

げにや我子にぢうだいを。ゆづるとしらぬ親と子の。<sup>アシ</sup>きゑんの

程こそふしきなれ。

前者が「なきふし」であり、「あはれ」という文句を二回も繰返し強調して悲哀に重点をおくのに対し、後者は普通の「フン」であり、観客に事實を事實として不思議なめぐり合わせを説明するだけ、哀の強制をここでは行なわず、次に来る劇的場面へすべての感情を集約して行く手法が見られる。登場人物も前者では男ばかりであるのに対し、後者では御台・姫君も登場し、多彩であるばかりでなく、親子・夫婦・主従の再会などが、ここ一点に集中され、意外な驚きと大きな歓喜のクライマックスとなる。舞台的色彩の多様性・複雑な様々の感情や喜び(具足親の儀式)・感嘆(若君の立派な態度)・不安(鎌倉の使者來訪)・怒り(手紙の内容)・意外な事實の連続(御台・姫・源内との來訪)・喜び(五十嵐の心)・歓喜の絶頂(与市夫婦・親子の情)・めでたさ(若君が返され、姫の結婚)などの零細の展開転による舞台の大きな劇的構成は当流義太夫節によつて初めて実現しえた近世的表現であったのである。

貞享四年義太夫段物集の序で「たてぬきのふしこい事有り。織物のごとし。さればこゑのあやをなすといへり」と言つてゐるようすに、節を縦横に織りなして複雑なややを音節に持たせる、この基本的音節構成を自由に駆使し、積み重ねて、義太夫節が構成されるのであるが、こうした複雑な手法による音曲の開発があったからこそ、右のクライマックス前後の淨瑠璃の劇的構成をも舞台に見事に繰り

広げえたのである。逆に言えば、こうした淨瑠璃の修辞や趣向が義太夫節のこの音曲性を生み出したとも言えるであろう。ここに作品と義太夫芸論との一致を見る。

『那須与市小桜威』には『なすの与一竹生嶋詣』に比して景事・道行の展開と劇的場面の成長とに特に著しい相違を見たのであるが、このことは景事や道行は太夫の節の聞かせ所であり、太夫が独自の意識や作用を持つに至り、淨瑠璃もそれを意識して執筆されていることを意味する。と同時に人形の意識が淨瑠璃に濃く反映されるに至り、人形の存在を十分に計算しての淨瑠璃制作であった。そして古淨瑠璃の物語的文学から劇的舞台的文学への淨瑠璃の変貌であつたことはいうまでもない。

『なすの「いこん』』『なすの与一竹生嶋詣』の一曲の比較でも既に新しい淨瑠璃への傾向が見られたが、更に『那須与市小桜威』になると、古淨瑠璃の典型的な語りの音曲の觀念から脱して、ようやく元禄末頃の太夫・人形舞台などの独特の要素を綜合した新しい演劇的淨瑠璃の形成となり、淨瑠璃と太夫芸論との関係が重視されるに至るのである。

ただここに見られる感情に苦惱や深刻な性格があまり見られず、むしろ明るい方向で種々の感情が統一されている所に元禄末頃の特性があり、悲劇であるべき世話物の『曾根崎心中』などにも一脈の共通性を見るのである。そしてこれは淨瑠璃ばかりでなく、義太夫節の音曲自体にも、この時期において示された一つの方向ではなかつたろうか。これが深刻・憂愁などの反対感情で裏付けられる深く幅広いものになる時に享保の性格が生まれるのであって、一応複雑ではあるが、それが一つの方向に単純化されている点に、この時期

の限界があるよう思つてゐる。

#### 四

次に『那須与市小桜威』と題材的に密接な関連をもつ『新版腰越状』を見よう。これは内題下に「竹本義大夫正本」とあり、更に同じく義大夫の奥書を持つ山本版であり、奥附形式も元禄期のものであるため、『外題年鑑』(明和版)の元禄十年四月六日竹本座初演を一応信用してよいであろう。

まずその題材の関連性であるが、義経が梶原景時に讒言されて鎌倉に入ることができず、腰越状を書き京へ引返すことが主筋ではあるが、那須与一とその妻のことが最初に大きく出され(第一)、与一が扇的の矢を射ることも大きく扱われ、妻もこの時再び登場する。そして一度破れた夫婦仲が義経によつて結ばれる(第二)。与一の妻、若草姫道行が置かれ、与一も大きく出る。五十嵐小豊次(小文治)が閑守として登場し、情ある男として描かれている(第三)。与一宗高の本領、下野国安堵の恩賞も見られる(第四)。与一の妻がはるばる京都まで上つて、大原に女院を見舞うため、義経までも行くといふ大きな役割として妻が描かれている(第五)。

このように各段にかなり大きな比重を以て与一夫婦が登場し、殊に妻若草の活躍は作全般にわたつて著しく、五十嵐小豊次も登場していることなどから考へると、『新版腰越状』は『那須与市小桜威』の前編のごとき関係にあるとみることもできよう。この点からも『新版腰越状』が元禄十年に竹本座に上演された後に筑後掾受領の元禄十四年五月以後に同じ竹本座に『那須与市小桜威』が上演されたと見る方が、『外題年鑑』の反対の順序の上演とするよりも自然

である。

『新版腰越状』を『那須与市小桜威』に並べて眺める時、景事的部分や道行などの展開と変化に富む明るい文学的表現、劇的場面構成の成長などの点において両作品に共通性を見出すことができる。

『新版腰越状』の景事的場面としては第一口の那須の与一が梶原景時に弓矢の講釈をする部分があり、また第二中の義経方の兵船を一つ一つ説明して行く部分もこれである。

また『若草姫道行』については、その文字譜を全部挙げれば、次の通りである。

フシ・ハル・地中・ウ・ウ・ウ・ウ・フシ・中ウ・ウ・ウ・フシヲ  
クリ・フシウ・ウ・フシ・ウ・ハル・中・ハルフシ・ハル・ウ・  
ウ・ウ・ウ・スエテ・キン・小ヲクリ・ウ・ウ・ウ・ノルフシ・  
ハル・ウ・フシ・中・フシ・中・ウ・下・ウ・地ウ・ウ・ハル・  
ウ・中・中ウ・スエテ・ウタイ・ウ・フシ・ウ・キン・ウ・ウ・  
中フシ・ハル・ハルフシ・中・小ヲクリ・キン・ウ・フシ・ウ・  
ハル・中・ハル・哥ハル・色・中・中・色・キン・中・ハル・フ  
シ・ハルフシ・ウ・ウ・ウ・ウ・フシ中・ウ・ハル・ウ・ウ・ウ  
・ハツミ・ハル・キンハルフシ・ウ・フシ・ウ・トル・ハル・キ  
ン・ハル・中・ウフシ・中・ウ・フシ・ウ・ハル・ハルフシ・ハ  
ル・長地・ウ・ウ・ウ・ウ・スエテ・中・哥中・ハル・中・キン  
・下・中・キン・中・ハル・中・ハル・ウ・ナヲス・ノル・ハル  
・中・ハル・下・ハル・ウ・ウ・キン・三重

この道行本文の字数は一四四字で、平均八・五字につき文字譜順に比較すると次のようになる。

なすの与一竹生鳴詠(寛文三年)	18	134	229	12.7
新版腰越状(元禄十年)	57	1144		
那須与市小桜威(元禄末頃)	534	8.5		

右の数字で大体の傾向はわかると思う。即ち『なすの与一竹生鳴詠』の道行本文が一二・七字に文字譜一つの割合であるのに対し、

『新版腰越状』では、八・五字に文字譜一つ、『那須与市小桜威』では九・三字に文字譜一つの割合となっており、寛文と元禄との道行節附の密度の相違を明らかに示しているといえよう。

また文字譜の種類からみても、「ウ」が著しく多く、「ヘル」も多い。「キン」も「歌」もあり、こうした明るい変化あるものと同時に低く静かな「下」もあるというふうに、むしろ『那須与市小桜威』よりも一層節の変化に富んでいるほどである。これらのことからみても元禄期の道行が音曲的には変化の多い複雑な曲調になって来たことが窺える。

次に劇的場面構成であるが、第二切の扇の刃を与一が射る場面で、その扇の下に立つ女房を与一の妻で離別中の若草姫とし、更に扇が射られた後に若草姫が与一と戦うなどの趣向は『平家物語』にも見られず、意外な、しかも華やかな劇的緊張場面を構成している。第四切の攻めよせる一階堂土佐房の軍に対する静の男まさりの戦いの配慮とその活躍ぶりは、これまた非常に興味的な明るい劇的効果を盛り上げる。第五の大原から帰る義経が土佐太郎近則に待ち伏せされたのを天狗が加勢する場も意表をつく劇的効果の一つであろう。

またこの作者は文章にも多くの感情的言葉を入れて、複雑極まる

感情を盛り込もうとしていたらしく、次の第三の最後の一節などは、これをよく示している。

しづかうれしくはしりより。判官のなをしの袖にすがりつゝうれしさもかなしさも。うらみも恋もうき事もなきもあたもつれなさも。又ゆかしさも恋しさも涙。計でしらせたり

## 五

小論では那須与一に関係ある題材の淨瑠璃を採り、寛文期の作品『なすのゝいこん』『なすの与一竹生鳴詠』と元禄期の『新版腰越状』『那須与市小桜威舟船遺恨』とを比較検討してきた。その結果は寛文期が純然たる古淨瑠璃時代であったにも拘らず、同一題材によりながらも『なすのゝいこん』に比し『なすの与一竹生鳴詠』には作者の意図の相違によると思われる新しい展開の傾向が既に早く見られたのである。元禄期は右の古淨瑠璃時代より、過渡的時期の加賀掾の時代を経て、当流淨瑠璃としての義太夫節が本格的活躍期に入つた初期の頃とも言えるが、この期の『那須与市小桜威舟船遺恨』には既に述べたように、古淨瑠璃時代の同題材のものに比し、格段の相違のある景事・道行の類の展開、劇的趣向の場の発達その他が見られ、しかもそれらは自由に大様で明るい雰囲気を伴つていた。これらは、その前編的色彩をもつ『新版腰越状』においても殆ど同様であった。この傾向は近世的淨瑠璃音曲としての義太夫節の成長・完成に全力を尽していった竹本義太夫(筑後掾)の芸意識が濃く反映したものであったことが考えられ、作品の署名のないこれらの作品(演博本『那須与一小桜威』)には奥附に作者名があるが、これは信用できない)においては特に太夫の比重が大きく考えられる

(作者の署名のないことは太夫に対する作者の自己主張の弱いことを意味する)。そしてこれは次のような貞享四年の義太夫段物集の序における義太夫の発言によって「一層確実に領くことができる」のである。

まず第一に、明るく大様であるべきことについては、

淨るりの姿も。只ゆうに大やうに。わかやかにだてをもとゝしてかたりたきもの

と言い、型にはまらぬ伸縮自在の語り方を、この時期に既に義太夫が實行していたことは、  
高壱尺の物を始五寸の内に七寸かたり末五寸の間を三寸にかたる事有り又はじめ五寸を二寸五分にかたり末五寸の間を七寸五分にかたる事有

などがこのことをよく語っている。

こうした義太夫の芸意識からみて、元禄期の義太夫節淨瑠璃作品には、これに相応するための景事的または劇的な、大様で明るい表現手法がとられてきたことは当然である。元禄期の義太夫(筑後掾)

の作者不明の語り物の一つである『那須与市小桜威井船遺恨』(作者不明と考えられる『那須与一小桜威』も同じ)は、こうした時期の特徴を顕著に反映したものであり、元禄期義太夫(筑後掾)の語り物の傾向を代弁するものの一つであつたということができよう。既に近松が義太夫(筑後掾)のために作品を与えていた当時、近松作品以外の名もなき作者による義太夫の語り物にも、こうした新しい傾向が濃く見られていることは、義太夫の芸風を考え合わせて、はじめて理解できることであり、同時に義太夫の芸風の発展を考える上においても見逃しえないのである。

近松と義太夫との関係については、既に多くの考察が試みられてゐるが、近松以外の義太夫の語り物についても今後の研究に俟つべきものが多い。

追記

演劇博物館本『那須与一小桜威』の調査に関し、内山美樹

子氏のお世話になつた。深謝の意を表する。

(大阪教育大学教授)